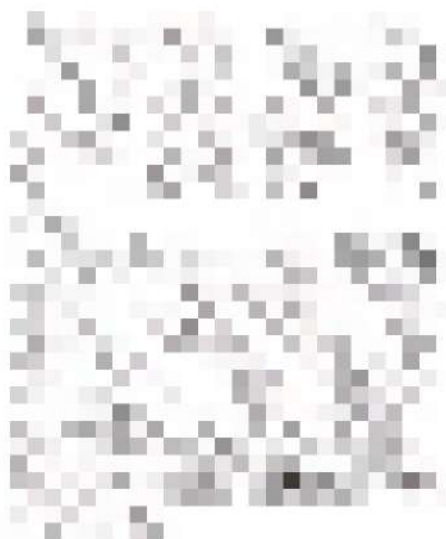
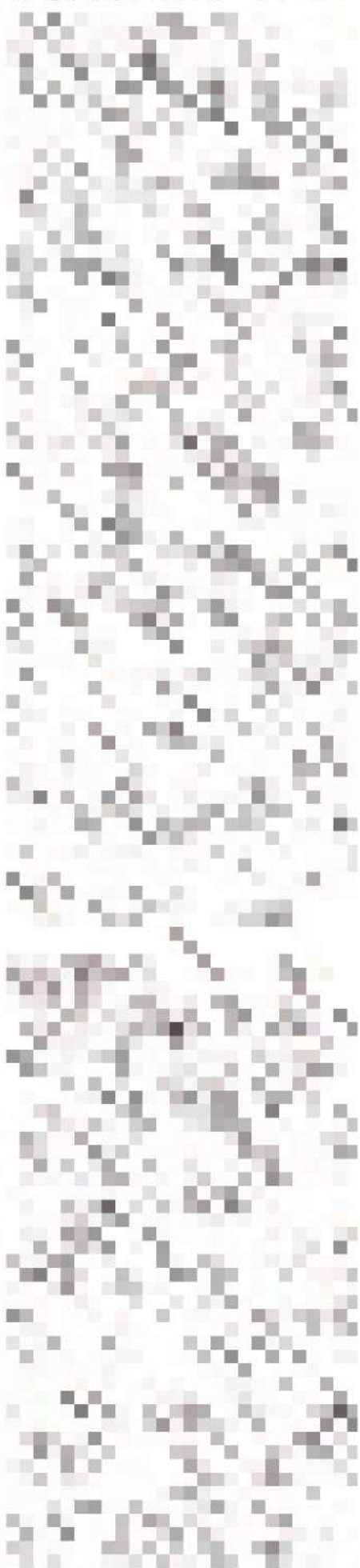


# Scramble Shot



## CONCERT 6月~9月 コンサート、イベントから EVENT

### Opera ● ハンブルク州立歌劇場 《エレクトラ》

ドイツのハンブルクで1973年から愛されているR.シュトラウス《エレクトラ》を、R.シュトラウスの演奏で定評のあるケント・ナガノが、音楽総監督1年目を終えようとしているこの時期に、どう聴かせるのか大変興味を引かれた。

アウグスト・エファーディングの演出は非常に古典的だ。舞台中央に大きな山があり、主にその前と上で、本物の火などを使いながら物語が進行していくので、臨場感はあるが、必ずしも演奏家にとって親切的な舞台ではない。案の定、歌手とオーケストラがうまく混じり合えないようだった。ナガノ率いるフィルハーモニー・ハンブルク（ハンブルク・フィルハーモニー管弦楽団）は確かに煌びやかな音色で、ロマンティックな楽想が出て来ると、このドロドロとした物語には贅沢なほど美しいハーモニーを聴かせていたが、音量を抑えられなかったのは大変残念だった。

藤村実穂子の歌うクリュテムネストラは、その異様な感じもあいまって素晴ら



ケント・ナガノが指揮した《エレクトラ》。1973年から続くプロダクションだ ©Halina Ploetz

しい存在感で、しっかりした歌唱だったのに対し、リンダ・ワトソンの題名役は、叫ぶような部分も多かった。クリュソテミスのリカルダ・メルベスは、かろうじてリリックな歌唱を保っていた。男性陣はオレストのヴィルヘルム・シュヴィングハンマーが始終美声を聴かせ、エギストのベーター・ガイヤールは感情豊かな声で人間性を帯びた情夫を歌った。

観客は充分満足していた様子だが、新陣営の劇場側はこの古いプロダクションをあまり評価していないようであった。（6月25日所見）（中 東生）

